

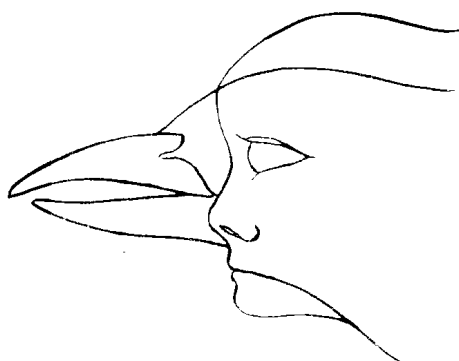
磁石のない旅

倉橋由美子



磁石のない旅

倉橋由美子



講談社

磁石のない旅

一九七九年二月十六日第一刷発行
一九七九年三月十五日第二刷発行

著者——倉橋由美子

© Yumiko Kurahashi 1979, Printed in Japan



発行者——野間省一

発行所——株式会社講談社

東京都文京区音羽二二三 郵便番号二三 電話東京〇三—九四一—二三 振替東京一三〇〇

印刷所——豊国印刷株式会社 製本所——黒柳製本株式会社

定価——九八〇円

落丁本・乱丁本はおとりかえします（文1）

目次

I 作家志望のQさんへの手紙 11

事実と小説 15

山本神右衛門常朝 18

悪い学生の弁 24

私の小説 28

面白い本 37

なぜ小説が書けないか 40

休業中 45

女の精神 48

秘められた聖像画——山下りん 52

『史記』と『論語』 56

小説の「進歩」 63

吉田健一氏の文章 67

カフカと私 74

『日本文学を読む』を読む 100

無気味なものと美しいもの 104

私の文章修業 106

II メメント・モリ 113

写真について 115

人間を変えるもの 122

育児のこと 127

女は子供と夫の母親 129

幻の夜明け 132

「女ですもの」の論理 133

人形たちは生きている 143

アメリカ流個人主義 145

わが町 148

土佐人について 150

誕生日 160

大人の知恵 161

「お母さん」読者手記選評

「子どもの教育」選考にあたって 165

「我が家の性教育」選考にあたって 167

「子どもの反抗期」を読んで 170

「子どもが原因の夫婦喧嘩」を読んで 172

迎春今昔 176

高知のチンチン電車 179

雑巾がけ 181

わが子しか眼中にないお母さんへ 184

ヤマモモと文旦 190

不思議な魅力——ジーン・セバーグ 194

Ⅲ 日記から

送り仮名 199

仮名遣 200

行儀 201

女の怒り 202

女の笑い 203

代理人 204

専門家 205

作家 206

政治家 207

家と屋 208

子供 209

週言

パイダゴース 211

自愛のすすめ 213

小説の効用 215

主婦の仕事と日々 217

わからないということ 219

文学が失ったもの 221

母親というもの 223

国語の大衆化 225

風変わりな一家 228

お伽噺 230

双点

ポストの幻想 233

ウィルスの世界 234

夢の話 235

カフカの悪夢 237

「です」調 238

「だ」調 239

「である」調 241

「いごっそう」考 242

不惑 243

不信論

245

文章の手習い

246

今月の日本

文運隆昌

248

寒波襲来

251

曲学阿世

255

文章鑑別

258

才女志願

262

家内安全

265

自彊不息

268

美味不信

272

兎戯饒舌

276

克己復礼

279

怪力乱神

282

妄想妄信

286

あとがき

290

磁石のない旅

倉橋由美子第三エッセイ集

装
幀
島
谷
晃

作家志望のQさんへの手紙

お手紙拝見いたしました（以下敬語省略）。こういう手紙を書くのはこれを最初で最後にしたいと思います。

小説を書いて身を立てたいのだそうで、そのためには就職することも止めようと考えている話ですが、私が「人生相談」欄の担当者だったら、一喝するか、どうぞ御随意にとにこにこするかのどちらかでしょう。あなたの場合は型通りのうじうじした文学青年のようですから、一喝したところで驚いて眼から鱗が落ちるといわけにはいかないでしょう。あなたの作家志望は、「人生相談」的見地からすれば流行歌手志望とまったく同列の問題ですから、あなたもそのつもりで自分の身の振り方を考えて下さい。

まず自分には文学的才能があるのだろうかというおたずねですが、同封のあなたの小説は読まずに返送いたします。私は自分が読む必要を感じる本以外のものを読むほどの好奇心には恵まれ

ておりません。第一その暇ありません。私は別に「流行作家」でも何でもありませんが、人間誰しもみだりに自分の時間を他人に使われたくないものです。それであなたの小説は読みませんが、私に対してあなたがとった行動、手紙の文章、そこにあらわれている考え方などから推測するに、あなたは私が見る基準からすれば、まず等級外の人物のようです。まともな職について働ける人間ではなさそうです。こういうとあなたは半ば居直って、だから文学をやるのだというかもしれません。が、「だから」では困るのです。「だから」という人間がやっている文学に私はうんざりしています。しかしこれはあくまで私の偏見なので、今日の文学がみなその「だから」なのだとなれば、あなたのような駄目な人間にも文学をやる才能だけはあるのかもしれない。流行歌手の才能についても同じことがいえます。私にその判定をする力はありません。

多分、あなたにも（女の子が鏡を見ながら決して絶望しない程度の不安とともにもっているのと同じ種類の）自信はあるのでしょうか。ただ、確実なのは、そういう自信をもった文学青年が日本には何万か何十万かいるということで、その中で毎年何とか賞をとる人が何人いるかを一度正確に調べて御覧なさい。それで気が遠くなるような話だと思えば身の振り方はおのずから決まるはずです。

しかしあなたは諦められず、自信の分量も不足していて、その代り一種の処世術、というより甘ったれた子供の狡さが身についているらしく、私に何とか引立ててくれと頼んできたわけです。どこかの新人賞に応募したいが、原稿の表紙に一筆推薦か紹介の言葉を書いていただければ審査員の目にとまって入選するチャンスも大きくなるだろうとは、あいた口もふさがりません。

まことに小人度し難しです。

確かに、砂の数ほどもある文学青年の中からあなたが選ばれるには運も必要です。私自身の場合もそうだったと思います。しかし今日では関係者が血眼になって有望な新人を「発掘」しようとしていることも事実です。あなたにも一定水準以上の才能があれば彼らはあなたを放ってはおかないでしょう。男らしく堂々と自分の力を試したらいかがですか。

もっともあなたはそういうことのできる人物でないからこそ私に女々しいことをいつてきたのでした。今の世の中、才能があってもそれだけでは認めてもらえない、などとふてくされているようですが、私はそういう人間が何より嫌いです。これ以上その腐った根性で甘ったれてこないで下さい。私が後進の人間を引立てる努力をしないのは冷たいとあなたはいますが、私には人を引立ててさしあげられるほどの力はありません。また子分だか弟子だか取巻きだかをつくるのが嬉しいような型の人間でもありません。それでも自分を *serious* した作家にはそういうことをする義務があるというのなら、その苦痛には耐えられそうにないのでいつでも廃業いたします。こういえばいいで、それも思い上がりだとあなたはいう。それなら人を引立ててやるなど本気で考える人は思い上ってはいないのか。何よりもまず、自分が私に何を求めているかを考えてみて、自分の卑しさに腹を立てていただきたいものです。

私がこれほどに口汚くいっても通じそうにない鈍感さ、甘えと一人よがり、そういう幼稚な人間がその自分の欠陥を他人に押しつけるのが、あなたの文学とか自己表現とかであるならば、どうかそれは密室の中に閉じこもって他人に迷惑のかからないようにしてやって下さい。最初、私

が御随意に、といったのは実はそういうことだったのです。

私にとって文学というものは生活を豊かにする御馳走のようなもので、昔からあるそういう御馳走に事欠かない限り、自分でまずいものをつくるのにあくせくするのは愚かしいと思うようになりました。あなたが考えている文学はこれとは大分違うようで、何か恐しく貧しくて、異様な臭気を放つことで人の注意を喚起するような性質のものでしょうか。そんな物で自分を顕示したいという病気が一日も早くなおることを祈っています。これはただ祈るしかないことなので、言葉であなたをなおすなどという希望も思い上りもないとすれば、この手紙を出すのも実は無用の事だと思えてきました。従って、結局例の如く返事は出さないことになります。悪しからず。